ひとの☀ちから CLOSE UP

元 青年海外協力隊 隊員 猿渡真由美さん

さるわたり・まゆみ　昭和54年生まれ、岱洋東在住。荒尾の好きな場所は有明海。趣味はサックス。5年前から習い始め、ジャズが演奏できるように奮闘中だそうです。

ことし9月、青年海外協力隊のエイズ対策の隊員として西アフリカのセネガルに派遣されていた猿渡真由美さんは、2年の任期を終えて古里の荒尾に戻ってきました。

セネガルに派遣される前は、通信制高校の養護教諭として活躍していた猿渡さん。性教育を中心に「生きること」をテーマに教壇に立ってきました。夢に向かって頑張る生徒の姿に刺激され、「海外で人の役に立ちたい」という学生時代からの夢を叶えるため、青年海外協力隊に参加しました。

セネガルでは、エイズの無料検査や性の相談などを行い、エイズ対策に努めてきました。エイズに感染している人が経済的に自立できるようにアクセサリーを作って観光客に販売する経路を確保するなど、取り組みの成果を実感することもできました。しかし、エイズの検査で陽性反応が出ても、周りの目を気にして病院に行かない人もいるなど、猿渡さんははがゆい思いをしたこともあります。

初めの頃は「みんなを助けたい」と、意気込んでいましたが、自分にできることの限界を感じ、思い悩んだこともありました。「本当にセネガルの人が求めていることは何だろう。支援を受けて先進国のようになることが本当の幸せなのか」と、自分に問い続けました。しかし、セネガルの人たちと日々を過ごすうちに、今のままでも彼らは十分幸せだと気付かされました。

「視点を少し変えるだけで世界は変わります」と、猿渡さんは話します。セネガルは物質的には恵まれていなくても、皆が助け合いながら暮らす―そんな温かい国だったのです。

今回の派遣を通して、「家族や友人の存在で幸せを感じるのは世界共通。国籍は違ってもみんな同じ人間なんだ」と、猿渡さんは大切な人の存在を再認識することができました。「幸せの要素」はみんな同じなのです。

現在は、海外での活動も視野に入れ、これまでの経験を生かして何ができるかを模索中という猿渡さん。これからの活躍が楽しみです。

1_「グラン・モスケ（大きなモスク）」。セネガルは人口の95%がイスラム教徒で、猿渡さんの任地であるンバケの隣街・トゥーバはセネガルの聖地でした。**2**_「ジャム　レック=平和　だけ」というあいさつが盛んに行われるなどセネガル人は平和が大好きです。**3**_エイズ感染者と作ったアクセサリー。200Fcfa（フランセーファー）（日本円で40円ほど）で販売していました。

編集　荒尾市総務部　秘書広報課広報広聴係
発行　〒864-8686　熊本県荒尾市宮内出目390番地
☎0968(63)1157　FAX 0968(63)1145　M kouhou@city.arao.lg.jp